

Title	洛星高校での授業について
Author(s)	紀平, 知樹; 寺田, 俊郎; 山本, 麻紀子 他
Citation	臨床哲学のメチエ. 2005, 14, p. 25-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7048
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

洛星高校での授業について

紀平 知樹

臨床哲学研究室では、これまで大阪府立福井高校で2年間、哲学の授業に取り組んできました（1年目の授業の報告は『臨床哲学のメチエ』vol.11を参照）。様々な経緯から、この福井高校での授業はいったん終了にしようとする研究室での話し合いで決まったところで、偶然の成り行きから、京都の私立高校の洛星高校で授業をしてみないか、という話をいただきました。

いったん福井高校での授業をやめることにしたので、そこでまた違う高校での授業を引き受けることに関して話し合いがもたれましたが、最終的には、有志4人がコーディネーターになることで、洛星高校での授業を引き受けることになりました。

洛星高校での授業を引き受けるにあたり、福井高校での授業を批判的に検討してみました。そこでいちばん問題になったのは、授業を通底するテーマに欠けていたということではないかということです。福井高校では、「出会いの哲学」ということで、様々な職業の人たちをお願いして、その人の仕事に関連する事柄について話してもらおうということを1年目はしていました。2年目も、基本線はそのままで授業を行っていましたが、そのような授業形態では、毎回テーマが変わってしまい、授業を受けている側の立場に立ったときに、「いったいこの授業は何の授業なのか？」という疑問を抱かせてしまうのではないかという危惧を抱きました。

このような反省から、洛星高校の授業では、年間を通じてのテーマを設定するという作業から授業の組み立てを考えました。コーディネーターで話し合った結果、「生命と哲学」というテーマで年間を通じて授業をするということが決まりました。つまり「生命」という問題に対して、「哲学」はどのように切り込んでいけるのか、また生命に関して、哲学的に議論するとはどのようなことか、ということ伝えるための時間にしたいということになりました。そして選ばれたテーマが、生命の始まりや終わりに関わる問題、身体をめぐる問題であり、リスクマネジメントに関する問題などです。

1年目の授業を終わってみて、十分に各回の内容が連関あるものとなっているかどうかは心許ないところもありますが、この授業をとってしてくれた生徒の皆さんは、それぞれの意見をよく聞き、理解し、また発言してくれており、当初の目的を、幾分かは達成できたのではないかと思います。

また今回このように洛星高校で授業をさせていただくにあたっては、私たちの研究室の卒業生でもあり、現在は洛星高校で非常勤講師として勤務している栗栖大司さんにひとかたならない協力をしていただきました。また同校の諸先生方にも大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

(きひらともき)

第1回 (4/17)

「哲学入門・内容と講師の紹介」

紀平知樹 (大阪大学大学院文学研究科) 他

全回を通して受講者に入れ替わりがないということで、初回はこの授業の目的や内容を説明することにした。参加者は臨床哲学研究室所属の教員の紀平と屋良、それから卒業生の三浦と森、第4回の授業担当者の山本の5名。栗栖さんにも参加していただいた。

まず紀平が配布した資料に基づいて、全6回の授業内容と講師のプロフィールを紹介し、その後に参加者ひとりひとりが自己紹介と研究テーマを話した。また、今後の授業の参考のために生徒からアンケートをとった。

第2回 (4/19)

「ヒトはいつ人になるか—ES細胞とクローン技術の倫理学」

寺田俊郎 (明治学院大学法学部)

担当者は洛星高校で教員をしていた寺田さん。生命倫理の問題について生徒間でディスカッションをする試みをした。まずディスカッションのために、生徒どうしが対面するよう机を動かし、それぞれの名前を書いた札を作って机の上に立ててもらった。

授業内容は2回連続の授業の1回目として、最初にES細胞やクローン技術について、生徒がどの程度知識を持っているかを聞きながら、新聞報道や資料を使って説明を行った。何人かの生徒はすでに知識を持っていたようである。そして、ディスカッションのテーマにするための問題点を生徒どうしで自由に相談し合い、その後に、各自、各グループで問題点の発表を行った。生徒から出た論点をいくつかあげておく。

- ①人間と他の動物の間に線引きをすることはできるか？
- ②人間がビジネスの道具になる—臓器作りなど
- ③受精卵と胎児・新生児の扱いの差別—胚は壊してよいか？
- ④クローン胚と受精卵の区別は成り立つか？

説明に時間がかかり出された論点について、初回は深く掘り下げることができなかったが、論点はかなりの確なものであったように思う。

第3回 (5/1)

「ヒトはいつ人になるか—ES細胞とクローン技術の倫理学」

寺田俊郎 (明治学院大学法学部)

前回の授業で生徒から出された論点の絞込みをして、生徒と哲学カフェ風にディスカッションを行った。議論したのは次の2点である。

- ① (クローン技術で) 同じ人間ができることで生じる問題—アイデンティティー、自分がなくなる？
- ②受精卵と胎児・新生児の扱いの差別—胚は壊してよいか？

どちらの問題についても驚くほど活発なやりとりが行われた。①に関しては、アイデンティティーについて、鷲田先生の文章を読んだことがあるらしく、この授業の前から深く考えていた生徒もいた。クローンがアイデンティティーを揺るがすという意見への反対意見としては「環境が違えば人格は異なる」「出自への疑問はクローンだけが感じるものではない」といったものが出された。ここから「アイデンティティーとは何か」という哲学的な疑問へとつながっていった。②に関しては、「医学的なメリット」と「ヒトから人への連続的な成長」という点で対立があった。

授業終了後も生徒が質問に来て、自分の意見の言い足りなかった点を寺田さんに熱心に話しており、生徒にとって強い関心を引き出した授業だったようである。

第4回 (5/8)

「つっこむことから始めよう」

山本麻紀子 (京都市立芸術大学大学院)、高嶋麻衣子 (大阪大学大学院文学研究科)

第4回の授業は少し違った角度から哲学的なものに触れてもらおうと思い、アーティストの方をお招きしました。まずは講師の山本さんの作品を鑑賞する事から始めて、日常生活の中から表現のきっかけを掴むということ、山本流の「つっこみ」作りということによって体験してもらいました。ただ初めは少し戸惑いも感じられました。この戸惑いには「美術」という枠から外れた山本さんの作品に対してのものや、これのどこが哲学なの？というものも含まれていたように思いますが、純粋に「面白い」山本さんの作品に触れるうち楽しむ空気が変わっていきました。

「つっこみ」作りの時間では同時に山本さんの作品を自由に見たり触ったりしてもらったのですが、「つっこみ」そっちのけで作品鑑賞に熱中する生徒もいたり、山本さんが座席の方まで行くと、疑問に思っていることなど小さなことでも真剣に聞いて来てくれたり、クラス中を爆笑させる「つっこみ」を作る生徒もいたり、講師の方もその反応の良さに感激しつつ、生徒の皆さんも普段とは違う授業を概ね楽しんでくれていたようでした。

第5回 (5/22)

「対話でトラブルを解決する—メディエーションを学び、使う」

稲葉一人 (科学技術文明研究所)

日常生活におけるさまざまな対人関係のトラブルをいかに解決するか。訴訟社会の米国において、訴訟によらずに当事者間の自発的な対話によって解決するためにサポートする新しい調停技法が開発された。それが「メディエーション」である。今回の授業では、元判事でもある稲葉が2人のスタッフとともに、その方法を模擬調停のビデオで紹介しつつ、生徒たちとの対話を通して、生徒たちの考えを深めた。

授業は、ビデオで調停の失敗例と成功例を視て、失敗の原因と成功の原因を話し合い、洞察を深める形で進めた。そこで、どのように問題を解決するか、紛争当事者同士がみずから対話によって発見できるためには、何が必要なのかを、相手の心を押し量りつつ、考えることが重視された。

本来の講義計画では生徒たちに実際に模擬調停をしてもらう予定であったが、時間がなく省略した。その点で生徒の不満があった。しかし、正解を一方向的に相手に押し付けるのではなく、どのようにしたら問題解決が可能かについて、さまざまなアイデアが出され、活発な議論があった。

第6回 (7/3)

「ヒトはいつ人になるか2」

森 芳周 (大谷大学文学部)

4/19と5/1の寺田さんの授業を受けて、より具体的に、ヒトが生存権を持つ人間になるのはどの時点かという線引きの方法について議論をした。目的は、胚や受精卵を利用する最先端の医学研究が、人間の成長の或る時点で線引きをするという倫理的、宗教的な問題と切り離せずに存在していることを、議論を通じて実際に知ってもらうことだった。用意した問いは以下の3点である。

- ①人間はどの時点から私たちと同じ尊厳(生存権)を持つのか？
- ②人間の尊厳・生存権の根拠はどこにあるのか？
- ③研究目的で胚を作成し、利用することは許されるか？

しかし生徒からの意見にうまく対処できず、①と②について議論をただけで終わってしまいました。生徒は「人間の尊厳」という言葉に対して疑問を抱いたようで、「なぜ人間に尊厳があって、動物には認めないのか？」という問いが出され、そこから、議論が思ってもみなかった方向に移ってしまい、最後まで元に戻すことができなかつた。議論が続かなくなることを心配していたが、むしろ途切れることがなく、それによって話が逸れてしまい、生徒にも私にも不完全燃焼といった感じが強く残った。

第7回 (10/30)

「リスク論」

屋良朝彦（大阪大学大学院21世紀COE特別研究員）

生命倫理のみならず、科学技術倫理一般に通底する問題として、「リスク論」を取り上げ、以下の三つの点を議論しようとした。

- 1 何がリスクなのか？
- 2 除去すべきリスクと許容すべきリスク
- 3 市民とリスク

リスクとは生命や健康への被害だけを指すのではなく、精神的、文化的なものをも含む多彩なものであり、科学者・専門家が一方的にリスクを指定できるものではない。したがって、何をリスクとすべきかということは科学者のみならず市民を含めた広範な議論が必要である。またリスクの完全な排除も多くの場合は困難であり、どのリスクが受け入れ可能かといったことも一方的に決定することはできない。

本来ならばディスカッションに多くの時間を割くべきところであったが、説明に時間を費やしすぎて、生徒に発言してもらった時間を十分にとることができなかった。

第8回 (11/6)

「出生に関する生命倫理の問題」

西村高宏（神戸学院大学非常勤講師）

今回の講義の目標は、「問題とする事象のもつ本来的な問題点の所在が浮き彫りになるような問を立ててみる」ということで、出生をめぐる医療現場（着床前診断、出生前診断、重度障害新生児の治療停止）において問題になっている胚・胎児・新生児などの〈身分〉にかんしての現状を報告し、それらをもとにじっさいに生徒のみなさんに〈問い〉をたててもらいました。

与えられた問題にすぐさま答えを出すのではなく、むしろ与えられた問題に含まれている本当の問題とは何か、またそれを明らかにするような問とはどのようなものかを考えてもらいたいと思いました。

第9回 (11/20)

「痛みのコミュニケーション」

中岡成文（大阪大学大学院文学研究科教授）

授業は、最初30分ほど問題についての説明を行い、その後生徒たちに自分が問題と思うことを〈問い〉の形であげてもらった。この出生に関わる問題は前期にも二度ほど行っており、その時にも出席していた生徒もおり、活発に意見が提出された。

今年度の授業の大きなテーマは「生命の哲学」であり、この回に関していえば、生命の問題から知識・身体の問題への転回点にあたる回であった。そこで具体性のあるテーマを素材として選び、抽象的な知識やそれにもとづく議論ではなく、むしろ「身体的実感」にもとづく議論を行うことを目指した。

実際には以下の二つの課題を設定した。

- 1 どのように痛みを感じるのか、またどのように痛みを表現（表出）するのか。
- 2 どのように痛みに対応するのか。

この二つのことを議論するために、さらに（1）自転車で転倒し、痛みを訴える患者の事例と、（2）糖尿病で入院中の乱暴な患者の事例を紹介した。この事例を紹介した後、議論を行った。

これまでの回と同様に、生徒たちからは活発に意見が出された。しかしながら「痛み」に関して十分な定義を行わなかった（身体的な痛みなのか、それとも精神的なものなのか）ために、生徒たちにとまどいを与えたようにも思われる。

第10回(11/27)

「地球は本当に丸いか—知識を哲学する」

寺田俊郎(明治学院大学法学部助教授)

いったい知識とは何か、それはどこからやってくるものか、私達が実際には見たこともないようなことについてどうしてそれが正しいといえるのか、といったことについて、様々な判断を通して考えてもらった。

最初に「地球は球形である」「人間は神によって土からつくられた」、「男はめそめそしてはならない」などといった9個の判断(命題)を例示して、それについて真か偽かを議論してもらった。その後、グループディスカッションの時間をとり、「真理の基準は何か」について各グループごとに話し合ってもらった。

今回の授業は、直前に開始時間が10分ほど繰り上がっていたが、学生にはそのことがあまり伝わっておらず、授業開始時間になっても休憩中と勘違いしている学生がいた。これまでの生命に関わる問題や、痛みの問題とは異なり、テーマは抽象度の高いものであったにもかかわらず、学生からは活発に意見が出された。

第11回(12/4)

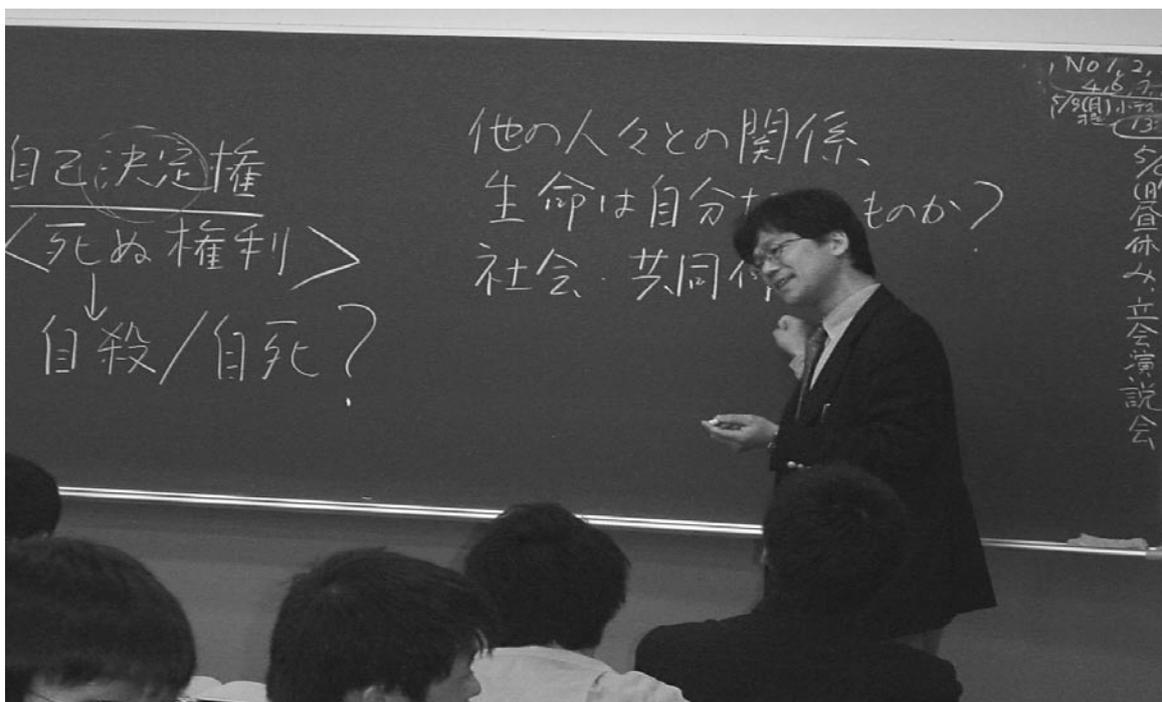
「他人や自分のからだってどうやって感じれるの? 無自覚の知」

玉地雅浩(藍野大学医療保健学部講師)

わたしたちが日頃何気なく行為や動作を行っているとき、わたしたちは体のことをどこまで自覚しているのか、また、自覚しなくてもできるのでしょうか。あるいは自覚している場合、どこまで感じる事ができたり、動かすことができるのでしょうか。これらの問題を考えながら他人や自分の体について、また人と一緒に動くには何が必要かを具体的な手がかりや課題や運動を通して考えてみた。

この授業は、実際に体を動かすということもあり、ふだんの教室ではない場所で行われました。

様々な例を提示しつつ、また生徒の皆さんにも実際に体験してもらうことによって、自分自身の体や、知覚について考えてもらおうと思ったが、受講生が40名ほどいたこと、屋外に出て声が届きにくかったこと、学校の球技大会の影響で、考えていた道具が使えなかったことなどが重なってしまい、思ったように授業を運ぶことができなかった。



第2回、第3回を担当した、寺田俊郎さん